

シリーズ<sup>§</sup>『青松』を読む<sup>§</sup>②

## 手づくりで詠む<sup>1)</sup>

——国立療養所大島青松園関係史料の保存と公開と活用に向けて——

阿部 安成

2015/4/5 瀬戸内海に霧

本稿では、『青松』の第2号と第3号を読むとしよう。

**第2号** <sup>おもて</sup>表紙には楓の木と紅葉の落葉を「素描」したとの絵がみえる「第貳輯」がつくられた<sup>2)</sup>。創刊号とも、またつぎの発行となる第3号とも、表紙のデザインや字体や雰囲気も異なる。赤く彩られた紅葉は、「恩賜楓」とのこと。この表紙にもまたやはり、「回覧」のスタンプが押され、「青山荘主人」「林」のサイン、「野島」「末沢」「山本」「高橋」の押印がある。この号はうしろのページが欠けていて、その全体を知ることはできない。第1号につづけて、おそらく1944年につくられたとおもわれるが（同号「巻頭言」参照）、表

1) 本稿は2015年度日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究C「20世紀日本の感染症管理と生をめぐる文化研究」(JSPS 科研費 26370788、研究代表者石居人也)、2015年度滋賀大学経済学部学術後援基金研究テーマ「歴史資料の保存と公開と活用の実践論」、2015年度滋賀大学環境総合研究センタープロジェクト研究「療養所環境を交ぜる」の成果の1つであり、シリーズ『青松』を読む①「手づくりで始まる」滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.243、2015年12月、の続編となる。

2) 手づくり『青松』は、第1号、第2輯、第3巻、と発行の順をあらわす語が一定していない。本稿では実際の表記を示したうえで号に統一した。

紙に発行年月日の記載はなく、奥付にあたるページも欠けているため、その正確なところはわからない（前号の「読后独語」ページに「二十一日受領／二十二日返／二号も一緒に来た」とあるので、第1号と第2号は同時につくられたのかもしれない。発行時期にかかわらず、2つの号をいっしょにわたしたこともあり得る）。

表紙の見返しに「巻頭言」と「目次」。無署名の「巻頭言」は、「大東亜戦争三週ンを迎へて」と現時をとらえて「愈々苛烈極りない血戦の様相をわれわれは回顧し、凝視すると共に、かの神風特別攻撃隊の一死もつて君国に殉ずる、ますらをの忠烈万世に薫る一筋の道に触れて如何に現在をあらしめ、この戦ひに副ひ得るかを熟考、即実行しなければならない」との決意を長い1文をとおして一気に記した。

すでに別稿でみたとおりに『青松』第1号においてもとりあげられた神風特別攻撃隊がここにも記されている。いかに「文武」の一体をとえようとも、「武」に生きる報国をなし得ない（とみなされてしまう、また、そう自覚する）療養者にとって、わが身の体当たりによって敵を撃滅させようとする生と死は、自分たちをその対極に位置づけることとなる。彼らは、そうした強烈な生と死を念頭におきながら、自分たちの「文」を考えることとなる。さきの長い1文につづけて、「この意味に於てわれわれ筆に死にせむの気概を持するもの一意専心、とぼしきを貫き、ますらをの心を心として有心の文学をものし以て皇国護持の信念に徹しなければならない。一時の気紛れであつてはならない」と、「文学」によって「皇国護持」を担える「ますらを」となるべくその意気をあらわした。

療養所での暮らしもけして楽ではなかったはずで、そこに生きているいま、「われわれはこの昭和十九年の起伏重畳たる決戦の道を生き超えて来たことを沁々と思ひ、是を鞏固なる礎石として来たるべき大いなる年に備へ更に一段の躍進を要望するものである」と「巻頭言」は結ばれた。

目次はつぎのとおり。

“恋闕の至情”／土谷勉／“長歌六月二十日”／斉木操／“短歌”／笠居誠一／志真郁夫／泉俊夫／斉木操／赤沢／浅野繁／“島庵独語”／穂波生／“俳句”／喜田正秋／“小品 軍人精神”／斉木操

**土谷勉** 「恋闕の至情」と題した稿で土谷はまた、「文と武が二ツでなく、吾国にあつては渾然たる一体であることについて私は前号に述べた」と記したとおり、ここでもまた「文と武」をとりあげた。「決戦下、時局は吾々に最大限の武力を要請して止まない。前線と銃後といふ言葉の区別さへ拭払された総力戦であり、国土挙げて戦場化し」というほどの戦争のさなか、「文」をどう活かすかを説くことが、みずからに課した使命であるかのようだ。

「敵を摧く最大限の武力の發揮こそ、吾々の唯一の生存法であるならば、けふに於て文も亦武に劣らず振起さるべきであらう」——なぜそういえるのか——「文の道が古来「風雅」とも「みやび」ともいはれ、優にやさしい対象とされた。「みやび」は「都恋ひ」であり恋闕の心であつて勤王であり、文の本質はあくまで「恋闕の至情」に発する草莽の止むに止まれぬ叫びでなければならない。まこと山陽の外史も神皇正統記も、恋闕の至情に発する大文章であつた。私は吾国の文の在り方をこゝに見たいと思ふ」からというのだ。

つづけて、「文が武の半面とも裏付ともいはれるのは、蓋し、武力の行使は恋闕の至情に発しなければならぬとする言ひ代へに外ならない」と記し、「恋闕の至情」についての言述が展開してゆく——「現人神であらせられる 天皇をお慕ひ申上げる、即ち、大詔を奉戴しての戦であることが、吾と敵との本質的相違であり、恋闕の至情に発する吾に対し、野望の達成に焦る彼との相違が、同じ武力の行使であつても、たとへ鉄砲一つ撃つにしても本質的相違であり、この相違が大東亜戦争であつて「天皇陛下万歳」を叫んで散華する忠勇なる将兵を思へば、吾が彼を鬼畜と憎んで余りある所以である」——前号の稿でも敵味方を彼我の違いとしてあらわした土谷はここでも、鬼畜の彼とそうでないわれとを分け、その境にあるものこそが「恋闕の至情」だということである。しかもその情は、「撃ちてし止まむ」の敵愾心はこゝに発し、敵愾心は恋闕の至情に基くその自らなる結果に過ぎない。敵愾心は恋闕の至情に由来し、恋闕の至情こそ吾が三千年の養正である」——さきに「敵を摧く最大限の武力の發揮こそ、吾々の唯一の生存法であるならば、けふに於て文も亦武に劣らず振起さるべきであらう」と記していたところをあわせみると、敵を撃破してこそわが身を護ることができ戦闘を終結させられるとの身構えが「恋闕の至情」と連動すると

説かれている。

ここで土谷は、「人は芸術の本質を真、善、美に要約する」と唱え、武士と天皇、日本とヨーロッパを対比させて、「本来」なるものを提示する。それは、「東照宮（私はこの名称を不遜極まると思ふ）の結構は仏陀的美であつて、吾が本来の美でなかつた。吾々の美はタウトを俟つまでもなく、桂離宮や伊勢の神苑のあの簡素な美しさである。神々しさは美の極限であつて、官能的ヨーロッパ美と全く違ふのである」というぐあいだ。「勤王の目」が設定されると、それからすれば「日光の結構も、東照宮の存在もない筈だ。真、善、美が恋闕の至情に帰納さるべきであると共に、秀ては富嶽となり、凝つては百錬の日本刀となり、発しては万朶の桜となる、文の在り様も亦こゝであると思ふ」と、桂離宮、伊勢神宮、富嶽、日本刀、桜といった日本ならではのなるもの、日本「本来」なるものなどなどがもちだされ、「文」もまたしかり、という論述が展開しているのである。

そして、「懼多くも、上御皇室の吾々に垂れさせ給ふ御仁慈は数ふるに暇ない。日本広しと謂へ、御仁慈の遍きこと、吾が癡園を以て第一等と為す。恋闕の至情また吾癡園を以て日本第一等としたい」というとき、現実にある御内帑金や楓の木や御歌の下賜が、療養者自身がしばしば「癡園」の外を「社会」と呼んだその場所に生きられないものたちにむけられたとき、「社会」の外に暮らし、その「癡園」をひとの闕外と自覚するものたちからすると下賜の「御仁慈」のどあいが最上級と感得せられ、それにみあつたこのうえない「恋闕」を捧げることをみずからに課したのだった。そうした自己と現状をめぐる認識があるとき、では、「恋闕の至情」にふさわしい「文」とはどうあるべきかを、土谷は説かなくてはならなくなる。

土谷の応答は——「思へば、吾癡園に文はもつともつと昂揚振起さるべき重大事である。単に短歌や俳句を作るといふ、そんなちつぽけなものではない。道としておほらかにである。私の大それた慾望も一重に草莽の微衷に存する決して不遜な願ひでないことが汲んでいたゞければ幸甚である」と、彼はその気概を明記したのだった。ここでは、ともかくも文を書く、しかも「おほらかに」という姿勢が示されたにすぎない。戦時下を書く、という彼らがみずからにわりあてた課役は、始まったばかりである。

**土谷の稿** 「恋闕の至情」と題された土谷の稿は、謄写版で罫目が刷られた原稿用紙にペン書きで記されていた。もっとも原稿用紙といってもそれは、「内用薬」などと活版印刷された「大島青松園薬局」による薬袋を開いた裏紙だった。そこには療養者名と「食後」のスタンプが押されたものもある。2つの薬袋には、切りとられた原稿用紙の紙片に「“お歌碑に陽のあたりある秋時雨” / 土谷勉」「“讚岐路の汽車が凍る夜笛鳴らす” / 土谷勉」と彼の作となる俳句がペン書きで記されている。ここでの綴じ方は、裏面もみえるようになっている。

最後の原稿用紙の裏はこれまた罫目が謄写版印刷されていて、そこに、

「天に雪霜なくんば、青松も草に若かず」／と、古人が訓へてゐる。雪や霜のない間は、松も草もみんな青々として区別がない。しかし、ひとたび雪や霜にあふと、草は枯れて松ばかり残つてゐる。本誌を「青松」と名付けた所以である。土谷勉

と、やはりペン書きで記されてある（傍点原文）。ここにはまた「青松標題について」と記された附箋が、いつの時点のものか不明ながらつけられている。本誌命名の由来であり、いわば名づけ親が土谷だったことをあらわしている。またこの文章は赤い墨(?)による波線で囲まれている。

**詠む** そのつぎの、エチュードとなる斉木操の文章は、「大島療養所」の名が入った原稿用紙に記されている。欄外に「(和歌) 習作帳ヨリ」と、最初の行には「六月二十日(長歌) 斉木操」とみえる。1944年6月のサイパンでの激戦を、斉木はラジオで聞いたのだろうか新聞で読んだのだろうか。

笠居誠一は縦罫紙に「近詠」6首を記した——「懸崖の小菊に和む日の光よ比島海戦の報道厳しき／老を知る身に冷えしみる暁の玻璃窓に白き月の光あり／この島を遂の生命の死と決めて松吹く風は聞くに寂げし／霜除けの菰をかむりて垣の根につましく咲く寒菊の花／掃きよせし桜の落葉焚きにつま薄紫の煙目に追ふ／日当り障子に黒き点となる蠅の羽音は聞きて籠れる」。戦時を詠った歌は最初の1首だけとなった。

ペン書きの署名のうえにさらに筆でしっかりとその名を記した志真郁夫は、前号につづけて「神風譜(二)」を寄せた——まず「皇国の隆盛かゝるこの日こそ神風としも化する榮

あれ」の1首があり、ついで「海陸特別攻撃隊」の題のもとに、「若くして神の境になりませる／寿すしかしこしすめら赤子ら／天皇に帰一し奉る神驚ら永久の生命を死して生くべし」の2首があり、ページがかわると、「神わしとあやに美したらちねの母の／乳房を夢む若きを／天皇に帰一し奉る若驚や／母のみ胸に眠る子を思へ／母のみ胸に抱かるゝ如く帰一せむ／赤子とあればむべならなくに／一機よく一艦屠る驚天の神の／み栄を行じ給ひぬ」といくらかの破調にして、くりかえし「母」を詠んでいる。この無地の紙の裏には、田辺照月、岸野オリブなどの短歌4首が記されている。女性の名が誌面にみえるのはめずらしい。

志真の短歌はもう1枚につづき、「沈まずと敵ども誇る戦艦も／航母も屠るすめら神わし／千よろづのあだし飛行機載／せて来よわが神わしの餌食とならむ／百たらず八十の航母も何かせむ／わが神わしの体当るとき」、もう一首、「震天制空隊」の題で「皇国のみ空を護り安からすあな／荒わしの奇しき神業」とうたわれた。その裏もまた、高木小羊、岸野オリブ、谷角夜潮、藤田薫水による4首がある。

つぎが、「(短歌) 斉木操」で、樹目が謄写版で刷られた原稿用紙にペン書きで記された「時々抄」6首のうち2首に「療養」の語がみえる——「みいくさに一つ凝る時世療養の自分兎や角くいふべくもなし」「療養のしづけさにふとありなれてきびしき時世に悖る想ひよ」。ほかには、「醜病みのせめて甲斐ある希ひとや弟の三心を捧げまつらく」「ある夜ふと命はかなく思ほへて庭に照る月いたく皓々し」「病ひはや術もなけれどみいくさの窮まる時よ玉砕をいふ」(〔 〕内は引用者による。以下同)、いずれも「十二月八日五首」とのこと。その裏は歌詞か?、「大陸行進曲」の文字がみえる。

斉木の短歌はもう1枚につづく。6首のうち2首にサイパンの語——「サイパンに続ける海に面停ちていきどほろしもかなしきまでに」「サイパンに在りて来しのみ音信もなく慮かりみしがもはも玉砕か」、ほかに「肉割かせ骨を断つべく喰ひしぱり堪ゆるいくさと吾うたかはず」「八年なり戦ひ来つつ今ははや何悔ゆるなく玉砕づるかや」。その裏には、小原節と伊那節の譜。

泉俊夫は「短歌詠草」に「闘ふ飛機」と題をつけた(謄写版刷り原稿用紙)——「爆音

と機銃連射のとどろきは交錯しつつ島をどよもす／標的機の耀よひ白き青空や飛機鮮やかに機首を返しつ／秋天ぞらの青き光りにまぎれつつ飛機はるかなり闘ひ鍛ふ／引き上げし櫓に沁むひかりかへ陽光反射しつつ舟徐ろに視野を過ぎたり／島紅葉映ゆる寂けさ秋は早や百舌鳥もずの鋭とごゑの澄み徹りつつ／百舌鳥一羽鋭かごゑ残して翔けりけり清らに今朝の空も澄みつつ」の6首には、戦時に季節が滲んでいる。

綾井讓の「(短歌)」5首にも戦時に季節が混じる——「えらばれて征くに光荣ありとこえのこす決死の兵若し／皇は畏かりけり兵は己が命を惜まざりけり／故郷は冬暖かし来る年も径〔頼り〕のなだりに梅の咲くらむ／いちはやく梅の花咲く我が村をうぐひす谷と人の言ひしか／ふるさとに帰る日のなし我が輩つまは何地に家をもつらむ」(原稿用紙裏)。

赤沢正美「雑詠」——「空襲の空ひやゝかに流れつゝ雲も燃ゆるぞ一つたましひに／天ゆきて乃ち越す神風や御民にあれば沁みて思ほゆ／傷熱の高きがまゝに更けし夜の冬ひそかなり動くものなく」(謄写版刷り原稿用紙)。

「空襲」と題された浅野繁の短歌は——「敵機いま襲ひ来るかも成層圏を息ひそめ思ふ雨しぶく中に／雨濛き海は見さけて敵機いま襲ひ来つつある成層圏を／濛く濛く雨そそぐ海や敵機いま襲ひ来るてふ心耳かき起つ」、「薰空挺隊のその後をひたに待ちまくる想ひはいよよ愴烈を極む／ジャングルに敵をうかがふ天兵のひかりひしひしと感ず／義勇刀とり佩を征けるますらをのたかき希ひを遂げしめ給へ／すめろぎにまつろひまつる民族の一人と征きて遂ひにし還らず／濃緑の戎衣と云へど写真にはただに白布のみむらぎもに沁む」

(以上5首は題「薰空挺隊讃歌」)、「秋さ中水脈ひき征きし魚雷艇をうつつに思ふすでに還らず」(以上1首題「魚雷艇戦を」)、「敵機いくた襲ひ来るともあやまたずいのちと屠り天を震はす／敵機にぞ体当り爆ぜてますらをのいのちは雲とこに常茜なす」(以上2首題「震天制空隊を讃ふ」)、「病みて尚生くるいのちをつつしみて懇願は遂げむ戦〔共〕ひのむた／身の病むはおろかならむか戦ひに召されぬ慨いくたびとなく」(以上2首題「十二月八日を迎へて」)。  
最後の1首の「慨」は、なげき、うれしい、いたみ、のどれとなるか。戦争がわが身の病をよりいっそうあぶりだし、しかし兵として効かぬわが身を憤るかのようだ。

浅野の稿の裏は、「笠居誠一用紙」の文字が入る原稿用紙で、そこにははっきりとした楷

書で10首が記されている——「玻璃窓のぬくとき室に籠り居て生活を持たぬ身をば悲しむ  
 ／風に乗りて模型グライダー飛ぶ原の草にひゞかふ童らのこゑ [欄外に「○」] ／幼な日の  
 思出語る盲人の手をひきつれて詣る宵宮／宵宮の更けし齊垣に冷ゆる灯や念ひ浄らに鳥居  
 をくゞる [欄外に「○」] ／死の迫る友の看護りに更けし夜の空を鋭声に鳴き過ぐる五位／  
 暮早き療舎の縁に見る海の潮の色はすでに冬なる／張りつぬし心のゆるみ術もなく火屋よ  
 り帰る道の明るさ／暮空を時に帰る鳥のかげ追ふ目に近き故郷の山／大瀬戸を潮浄らに流  
 れたり星港陥落の報至るとき／馬來戦線怒濤と進む益良男の陽焼けし顔が眼に浮ぶも」。星  
 港はシンガポール、馬來はマレー。

秀作は、赤沢と浅野のうたか。

**島庵独語** 長田穂波は「島庵独語」の題での連載を確かなものとしようとしていた。その冒頭に、「今日は年末気分を一寸出して居る。したがって一ヶ年の夢物語りとなる」と記されているところからして、この第2号は1944年12月につくられたともいえよう。穂波は、「一ヶ年の間……先ず今年も一日の病臥する事も無く頑健に過ぎた、有難ひことだ」と記す。ペンは、自己の身体、健康を綴り、「時局」を論じてゆく——「益々苛烈さを加へる時局に対して、深い国民としての自覚を持し、強く決心は出来て居る」という。だが「然し別に不平はなく心騒く事もなく普通三十余年の過去の生活と大差ない、誠に心静かなりである。側目には変な存在と思はれるであらふ」とは、たしかにさきにみた短歌を詠んだ病友たちのころもちとは異なっている。

ペンは秋の雨、果樹園の薯を、そして「改宗」と「恩寵」を記す。そして、「さて昭和十九年も余日僅となつた。／偉大なのは『時の流れ』である。恐ろしい地球全面の大動乱も現在を残したのみで……凡て歴史と言ふ過去帳の内に追込み……物も人も何処へか流し去つて終つたでないか。文化はフスボツテ真黒になつた。／そして『時』は日々に国家の興亡を問ふてゐる！彼は厳肅な、そして冷静な、黙々として審判しつゝある。悪く言へば……暴君のやうだ……そして人の世はミゼラブルなあえぎを続けてゐる如しだ」(下線原文)と説く穂波は、米国、英国、仏国、ソ聯を比較したのちに、「愛する祖国日本よ — 義は国を高くし罪は民を恥しむ — これを銘記して聖戦を完遂せんことを祈る」と願うのだった。



この稿の穂波の文章は飄々とし、それを記すペンには弱弱しさを少し感じる。

**その裏** 穂波の「島庵独語」は「西香 43」と印字された原稿用紙の裏に記されていた。『青松』では裏紙となる原稿用紙の罫目にもきちんと穂波のペン字が記されてある。前後が欠けているその稿は（ノズルは3から7まで）、下書きにしてはていねいなペン字とみえる。「ヨハネ伝九〇は私の入信の思想的動機となった源泉で、この聖言に接しなければ中々に受洗迄ゆかなかつたかも知れません」の記述からは、穂波が属するキリスト教信徒団体である霊交会の機関紙『霊交』などに用意した原稿とおもわれる。手書き『青松』がつくられた1944年の時点では、すでにその4年まえに『霊交』は廃刊となっていた。

「すこしく注意深き人は、穂波は礼拝堂では温いが病床や物質交際的には冷たいと心附かれて居られませう……！」と、穂波は自身を記してゆく——「さて我が年も五拾四才になりました。子供の時に発病して、十八才で入所して満三十五年大島で養はれました……国家の粟を無為にして沢山に喰ひ……ました勿体ない事であります。故に神の前に国家の御恩を感謝して、すこしにても国家へ報恩をと祈つて居り、原稿記す心の中にも同胞の爲めにと思ふ心が常に含まれて居ります」。

ここで穂波について書いておこう。じつはこの『青松』のあとの号で、穂波のひととなり詳細に記録されることとなるのだが、この穂波の稿がいつ執筆となるのかをたしかめるためにも、すこしだけ先走りしよう。穂波は1891年の生まれで、1945年12月に亡くなる。記録では享年55歳となっている。当時の数え方からしてそうなるのであれば、「さて我が年も五拾四才になりました」とは、1944年を指しているとなる。「さて昭和十九年も余日僅となつた」と本文に記される「島庵独語」は、穂波逝去のほぼ1年まえに書かれたこととなり、その裏面の原稿用紙に清書されたとみえる稿は、それよりもまえに書かれたのだろう。穂波は、裏面となった原稿用紙に、

不思議に健康も比較的恵まれて、三十年以上重病室へ入院もせずに参りましたが、さて此健康が何程……神の御益に立つて居るか……と言ふことが反省さゝれてゐます。／  
処が最近は、すこしく耳も遠くなり、目も視力が弱り、根気もをとろへて来ました。そこで……天国行きの準備……を致し度いと存じ、何かと内省的に改め度いと存じます。

とわが身をみつめていた。

霊交会についても、「霊交会の為めにと思ふ心は、皆さんに負けない心算でゐますし……御国へ召さるゝ瞬間までおもちひ下さるやう……と祈つてゐます」と記して、稿が結ばれている。さきにわたしが記した穂波のペンの弱さとは、この翌年の彼の死を知っているがためにいくらか感傷をあらわしてしまったこととなろうか。

**俳句** 喜田正秋が俳句7句を寄せた。謄写版刷り原稿用紙に筆書き——「火を吐いて墜<sup>お</sup>つる敵機や穴まどひ／相對す八栗屋島や山粧ふ／茸汁の二人に鍋の大いさよ／流れきて雲ひろごりぬ後の月／密漁の船に明さよ十三夜／近よれば来なと手を上げ囀守／来なと云ふ瞳あいらし囀守」。戦時も季節も日常も、喜田は詠んだ。

**斉木の創作** 「軍人精神」と題された斉木操の文章は、縦罫が印刷された罫紙の裏にペンで記されている。表面の罫紙にはやはり文章が記されているが、それは斉木のペンとはちがうようにみえる。その表面には、活版印刷の本の一部とみえるページが貼られている。この斉木の稿は後欠で、それが載る第2号もそこで途切れている。

題目の右上には「習作」「(小品)」と附記された斉木の創作をみよう。「弟は三年振りの帰還なのであつた」と始まるこの小品は、残されたかぎりでいうと、弟とその妹との水蜜をめぐる場面の描写にとどまっている。弟は「晴の凱旋などとは打て変つた傷はしい白衣の帰還」であり「それも瀕死の態を担架に乗せられやつと内地まで帰り得たといふのであり、妹が「附添」をしている。ただその弟は帰還して「三ヶ月」のところで、「宵闇に散る桜花と共に、敵撃滅の恨み遺して病に斃れて逝つ」てしまったと冒頭で示されている。

水蜜をほしがる兄に、3月だからあるかどうかと心配する妹は缶詰のそれを手に入れてあたえようとする。そのとき妹が「左手の幾枚かの釣銭の札を金入に無雑作に突込み、そのまゝ帯の間に挟まうとした、其の瞬間」に兄が「破鐘の様な怒声」をあげた。その「無雑作」さが兄には「金を粗末に扱つてる」とみえ、それで「戦争に勝てるか？」と叱ることとなったというのだ。始めは「重病人の何所にこんな力があるのかと思ふ程の烈しい気魄」も「何時か穏かとなり低声となつてきて果は諄々と説き語るようになったそのなかで、妹は「真摯熱烈な兄の一本気な愛国の至情が身に沁みて来」た一方で、兄は「病み寢れ瘦

せ細った体一ぱい、憂国の志情に堪へぬと云ふ如く語り続け」た——というところまでしか原稿が残っていない。

ここにいう「一本気な愛国の至情」「憂国の志情」が「軍人精神」だということのかもしれないが、5枚しか残っていない原稿では、それをとおしてなにをどのように創作しようとするのかはわかりようがない。

第2号はここまでとなる。

**第3号** 表紙の題字と巻号数（「第三巻」）の表記が、第1号同様に左から右への横書きとなっている。第2号は右から左へとになっていた。表紙右端には縦に、「昭和二十年一月二十二日」とみえる。表紙への押印またはサインは、「野島」（右から左右へ「野島」とある角印）の押印と手書きの「高橋」「林」のみ確認でき、ほかの1つが不明。手書きサインは、名を丸で囲み、「林」については「文人」の2文字もある（「大人」のつもりか?）。

表紙見返しが目次となる——「巻頭言／文の道 土谷勉／神風譜（短歌） 志真郁夫／島庵独語 長田穂波／短歌 笠居誠一／神韻（短歌） 浅の繁／短歌 綾井譲／特攻隊（短歌） 泉俊夫／ヨ約の真似 斉木操／俳句 喜田正秋／「青松」の誕生を祝して 斉木操／あとがき 土谷勉」。

ついで、「坂内晴嵐筆」の「大近松」の絵が、なにか印刷物から切りとられて貼られている。だれの趣向か。その裏面はいずれも新聞紙面からの短歌の切り抜きとなっていて、川田順の「乙酉元旦」、斎藤茂吉の「皇国の春」、橋本関雪の「近詠」である。ペンの手書きで、「中条先生より大谷皇太后宮大夫閣下へ／ちのみごの乳房こがるゝ心地にて大み後のみ業仰がむ／閣下より／いましばしいこへとこそはおぼすらめ 神のみさとし守りませ君」とある。

**巻頭言+** 第3号の「巻頭言」は土谷勉の執筆——「「征けるなら」「特攻隊になれるなら」——等々。それほど吾々の身边には御奉公の道がないのか。否、在るからこそ強いて目を覆ひ、敢へて不可能の仮定の下に力みたがるのだ。／不可能の仮定である以上責任はない。何といふ卑劣な心か。ごまかす事はお互ひやめよう。立派な歌を作ることも御奉公である。／（土谷勉）」。

ここには病友に対する激しい憤りがある。できもしないことをできないというな、われわれにできることがある、「立派な歌を作ることも御奉公である」、とは、これまで土谷が説いてきたところである。うたを詠むことに専心したといい得る前号があればこそその啖呵である。

そのつぎは、「10×20」と印字された原稿用紙（さきの土谷の稿と同一か不明）に、「青山荘 林先生のお便りの一節」と題された稿がある——「(前略) / 何せ寒いので床の中に居る事が多く立つて居る時は庭山の枯羊歯刈りで働いてゐないと寒いので筆をとらぬのです。炭の配給は一つもないのでこれがよい対策です。(後略) / “羊歯刈りや羊歯に古枯さけながら” / “枯羊歯を風呂たく母へかゝへゆく” / “羊歯かゝへ立てばよろめく木枯に”」。

**土谷の言** その意思を決然と「巻頭言」に掲げた土谷は、堂々原稿用紙 12 枚におよぶ論稿をこの第 3 号に載せた。「文の道」という論題はその内容がこれまでの継続であることを示しているものの、その紙幅は第 1 号 10 枚（9 枚と 1 行）、第 2 号 8 枚よりも増え、その思いを存分に吐きだそうとしたかのようにみえる。

冒頭に「文は道である」と、さかさに言つた方がわかり易いかも知れない」といったんおきはしたが、この「さかさに」の文字に抹消線が引かれている。ついで、「文が遠く肇国の精神に根源する一事に想到すれば至極たうぜんである」と、これまで同様に歴史の始原にさかのぼって「文」なるものの理を説こうとしている。では、なぜ「道」なのか。

芸術にも科学にもみな国がある。文にも亦故郷がある。しかも吾国にあつては「茶道」「華道」と、特に「道」といふ字がついてゐるのに注意をはらひたい。これは一重に惟神の道に通じ、現人神に全ては帰一し奉るべき臣道の実践を示してゐるのに他ならない。臣道の実践は、まつろひ奉ることである。奉行であり、承諾必謹である。吾国では古今を通じ、文の真姿は決して戯れ事でなかつた。巖然たる仕奉の道であつた。

と説かれる。ついで、「文が道である吾国では」と書きだされれば、論題にいう「文は道である」が自明視されてしまい、そのうえで、「文が道である吾国では「言行は一如である」といふことである」とうけとめられ、前号で述べられた「文と武」とが「渾然たる一体」であるとの主張がここでは、「言行は一如である」と別言されたのだった。「言霊の幸はふ

国」に空言はなかつた」わけで、「言葉は真実であり、責任を持つといふことであつた。何といふおごそかな、しかも麗しい吾祖先の心であつたらう」との感慨となる。

ここで土谷は、「<sup>ひと</sup>霊留」「<sup>ひこ</sup>霊子」との表記を用いる——「ひととは神霊の宿り留まる<sup>ひと</sup>霊留であり、<sup>ひと</sup>霊留はその霊を覚まし、明して<sup>ひこ</sup>霊子と化し、惟神に通ずると信じた祖先であつた」と過去の事例が参照される。その具体例はというと、「話はそれるが」との言いだして、「彼の特別攻撃隊の諸勇士の如き、あきらかにその霊を覚まし、明して<sup>ひこ</sup>霊子と化し、惟神に通じたのであつた」というのである。そして、「精進潔斎、職場に注連を張つて日本刀を鍛へた昔の刀匠の心事も亦、こゝに始めて理解のとゞくことであつた。刀匠の全霊凝つて成つたと同様に、吾々は文に心魂を徹したい。文はそのくらみおごそかなものである」と明記されたのだった。

このあたりはもはや論ではなく、信念の表明となっている。「文」なるものの意義をいいたてることが主眼となった文章である。

土谷は現時の青松園にも言及する——「青松園を立派にするのも、煎じつめればかりそめの言葉にもお互ひが責任をもち、うそ偽り、空言を弄さないことである。それが又、日本人たる当然である。／ふだんに人は「血涙の手記」とか「魂の声」とか言ひたがる。しかし、考へればあたり前で、日本人の書くものに真実が欠けてゐてならうか。例に引くのは失礼かも知れないが、歌集「松籟」では笠居君のひとゝなりが窺へるし、「星霜」では浅野君の察しがつく。歌の立派なのが、たゞたんに歌作りに秀でたのであつてはならない。歌が巧いのは、その人間が出来てゐる別の謂でなければならぬ。〔中略〕ひとが<sup>ひと</sup>霊留であり、<sup>ひこ</sup>霊子である自覚に立てば、空言は神をおそれぬ行為であり、神の冒瀆である。〔中略〕かつての「藻汐草」は青松園を理解していたゞく上にたいへん貢献したが、若し「藻汐草」がつまらぬ代物であつたとするならば、青松園はつまらないと、人は見勝ちであつたらう。「来りて視よ」なんて幾ら力んだところで、人はなかなかさう信じなかつたらう。「青松」の場合も同じである」。

いくらか論の筋が乱れながら、ともかくも土谷は「文」なるものをもって戦時を生きる<sup>よすが</sup>縁としていたのである。

読書するのが、物識りになるためでなし、書くのが、暇つぶしでもあるまい。読むのも書くのも一に霊を覚まし明かす為であり、仕事に尽きる日常生活の一端にすぎない。修身の具にしたい私の念願もこゝにあるのである。文がかりそめになされてたまるものか。人も吾れもさうでありたい。おろそかにしては相済まない。文によつて神を招くといふのは憧れではあつても、拙い私には及びもつかない高いものであるが、すくなくとも神に仕へる位の謙虚さは失ひたくないものである。

——原稿用紙 12 枚にもおよぶ長編のなかに「文がかりそめになされてたまるものか」と記された一瞬の憤激とでも読みたくなるこの 1 文が、土谷の意思の心髄にあり、この宣言の実践として「文」が記されるのであれば、それこそが「私にとつて仕奉の道」となるというのである。

土谷は「数年来、机上に注連飾りを結うて年をお迎へする私である」とみせ、「決勝に輝く昭和二十年の元旦にも変りはなかつた。思へば時局下、勿体ないことであつた。洋々悠然、初日の如く清明な気持で、この一年も机に向ひたい私の念願である」と、年がかわつてつくられた最初の号に、その抱負を記した。大島の療養所で作られた『青松』誌上での 1945 年の幕開けである。

**原稿の裏** 土谷の文章は、これまた「内用薬」「大島青松園薬局」などと活版印刷された薬袋の裏面に謄写版で刷られた原稿用紙に記されてあつた。本誌第 2 号に綴じられたそれとくらべると、第 3 号に用いられた薬袋は、特定の療養者用だった。「今井寿」「今井比沙志」「今井ヒサシ」「今井比佐志」と名まえの表記法が異なる理由がわからない。また、この今井と土谷との関係もわからない。

3 枚めの原稿用紙の裏は、郵便の宛て名書きに使われた紙で、宛所が「香川県木田郡庵治／今井元様」、「年 月 日」と印刷されたところには順に「19」「8」「10」の数字が手書きで入っている。差出人にあたる印字が「東京市麴町区霞ヶ関三丁目三番地」の「ダイヤモンド社」となり、「相談部」の印字に抹消線が引かれ、そのとなりに「編輯局」とのペン手書きがみえる。

原稿用紙 5 枚めの裏は、実業之日本社からおくられたとおもわれる活版刷り文書で、そ

ここに「北上聖牛筆」のキャプションがついた日本画の印刷物が貼られている。おなじく 6枚めの裏は、やはり土谷のペンになる没原稿のよう。同 11 枚めの裏は、著作者発行者が井本益喜となる『受難の天華』の奥付ページである（発行は 1939 年 1 月 20 日）。

同 12 枚めの裏面には、田村木国による「詠魂即闘魂」と題された新聞記事の切り抜きが貼られ、土谷による「作品（俳句）」が 3 句——「冬晴れやよく啼く小鳥松にゐて／病友に母恋ふ詩あり椿咲く／壕の土手分けて隣と種を播く」。田村執筆の記事は、「神風特攻隊の神々達が一首を、一句を、遺して莞爾として出で発つその歌俳をもはや単なる遊戯だと思つてゐるものはあるまいが、作家としては今日はさらにもつと深い省察がなければならぬ。その歌ひあげた一首が、一句が、須く一億の士気を鼓舞し、一億の心情をゆたかにするものでなくてはならない。〔中略〕今日の俳句は一見月を詠じ花を詠つてゐても、その底流するものに烈々たる闘魂の沈潜がなければならぬ。詠魂即闘魂であれば鏡餅が小さいといふ事実を事実として詠ふにしてもおのづから「小さけれども」とならずにはをれない。もはや理窟ではない、それでなければ今日の俳句として存在の意義はないのである」と説く。

土谷は、「歌俳をもはや単なる遊戯だと思つてゐるものはあるまい」「今日の俳句は一見月を詠じ花を詠つてゐても、その底流するものに烈々たる闘魂の沈潜がなければならぬ」との書きぶりに共感し、記事の見出しに感じ入ったのだろうが、はしなくも、「もはや理窟ではない」との非論理ぶりをもみせてしまったのである。

**詠む** 志真郁夫の「短歌 神風譜（三）」は、まず「昭和二十年元旦之計」として「一億の末の末なる我もまた片居の日日を神風とせむ」と、みずからを「一億の末の末」にいると自覚する「我」ではあるが、癩者（片居）として生きる日々を「神風」とするとうたっている。これは土谷の「巻頭言」からすれば、「不可能の仮定の下に力みたが」っているのではないのだろうか。

「御題 社頭梅花」では「神鷲となりて散りにし氏子らが祈りて征きし神の梅さく」と、そして、「畏も天皇陛下に於かせられては陸軍特攻飛行隊護国隊内地基地出撃に際し有難き御沙汰を賜ふ、今征くと聞召されて神鷲にいとまかしこし賜ふ御言葉」とうたい、また「転業翼賛」として「神鷲とよくぞ育ちし幸ひの一と世を捧ぐ大きみくさに」と詠んだ（その

裏には筆書きで「神鷲となりて」と「一億の末の末」の2首。「庶務部」の押印と「十行二十字詰」の印字がある原稿用紙。表はペン書き)。

つづけて、「驕米比島ルソン島に強引上陸を敢行し来る撃敵の神機至れり皇軍は陸海空に体当たりつゝ」として、「決戦すとルソンに上る敵軍を殲滅の機ぞ正に至れり」「出で立たばあだし撃ちても帰らざる翼をふりて基地を出で発つ」「一億の一人のこらず特攻の体当りもて敵を撃たなむ」と詠んだ。

そのつぎのページには、太い筆書きで「昭和二十年新春題／噫白鳥神諭畏今一億神風特攻秋飭勿怠王化鴻基聖戦四年大化春」と記されている。この裏面は「大島療養所」の名が印刷された原稿用紙(20字×10行×2頁)で、罫目にペン書きのちいさな字で『『聖恩邱山』これは私の入所当時即ち今から二十一年前の大正十年頃、当所の会堂(礼拝堂)の後正面に掲げられ在った扁額の揮毫の文字である』と記されている。

**島庵独語** 長田穂波の「島庵独語」も連載第3回となった。冒頭には新年の挨拶。そして、「さて新年は如何なる年でせう?決して楽な年とは想はれません。しかし既に覚悟は十分出来て居ります＝皇国心さへ確立すれば矢でも鉄砲でも持つて来い＝であります」と記して、その「覚悟」の一端をつぎのとおり示した。

何と申しましても尽忠報国を心に祈り實際生活に行つて＝青松園をして明朗な大家庭として＝皆が造り保つ、そのために頑張り、凡ての事に不平をこぼさないやうに致しませう。／○／一番つゝしむべきは＝美しい言の空手形となる＝事のないやうに。これであります。日本人として時局に処して実際に耐え忍び、更に力の限り最善を尽しませう。

と、穂波も年頭の抱負をみせ、ついで、「大島の私共の最善は何か?」と問う。

指導方針と言ふはもとよりですが一人々々が＝ハツキリとした方針と確き心構を持たねばなりません＝それは全体主義即ち共同の幸福を計る事こそ大切であります。〔傍点原文〕

と穂波が説くとき、さきの「青松園をして明朗な大家庭として」とは、瀬戸内海でつながる隣園といってよい国立療養所長島愛生園に展開した家族主義を想起させる療友の連携で



あり、それはまた園内統治の技法でもあった。では、「全体主義」とはなにをいうのだろうか。

全体主義には — 個人の我儘が何よりの敵であります — 利己主義が暗くする基であります。住む部屋の円満を欠ぐのも、友情を破るのも、協和会を害するのも。皆これこの敵によりて生ずるのであります。

と説くのであれば、これはたんに「我儘」や「利己主義」に対置される心身の仕法となるのか。なお、協和会とは大島の療養所に展開した自治組織の名称である。

つづけて、「故に青松園を明朗化する事、幸福な生活は — 自己を後にして他を愛するにであります — 全体主義とは個人主義の正反対であります。個人の利を捨てこそ幸福が得られるのです」といい、そのために「修養」が必要で、それは「修養と言へば無津加しい。併し一番に要易な道は宗教心の高揚であります — 信仰によりて神仏の援助を頂く事 — であります。然るに時局に入りて大島の宗教が下火になりし観あるは悲しむべき事と存じます。新年は各宗の一大奮起を望みます」と、信心の振起と宗教活動の隆盛が望まれたのだった。「宗教の奮起」により、ひとの内に巣くう「物慾猿や利己狼」を圧するというのである。

この穂波の稿には、「一月十三日記す」との附記があった。

穂波のいう「全体主義」が「個人主義の正反対」であり、「自己を後にして他を愛する」ことというのであれば、わが身を家庭、家族、郷里からみずから療養所へと引き離れた療養者たちは、その「全体主義」の真の実践者となるだろう。ほかのひとに病を伝染させないために、家族が排除されないようにと、わが身を隔離させたのだから。

**その裏面** 穂波の文章は5枚の原稿用紙の裏にペンで書かれていた。それは「KYOKUTO 10×20」と印字された四百字詰め原稿用紙。その罫目もまたペン書きの文字で埋まり、56、55、54、53、60のノンブルが記してあった。裏面よりインクが薄いものの、穂波によるしっかりとしたペン書きの文字がある。

罫目に記された、時局と信仰をめぐる文章は、これまた没原稿としたものの断片なのだろうか。

なお、およそ柀目 2 文字分にわたる ≡ の記号は、ほかの穂波の原稿にもみられる彼独特の書き方である。

**詠む** 笠居誠一の「短歌」は 12 首——「み戦の働きに思ふ利に走る闇のたはけら祈り殺さな」「興亡の此のみ戦に利を漁る闇のたはけら赦すべからず」と 2 度もうたわれる戯けたちへの怒りは激しい。他方で、「風花の寒き夕べの藪蔭に枇杷の房花慎ましく咲く」と季節をおもい、また天体と時局とが結びつく——「警報下に眠る療舎の空高くスバル星座の光澄みにけり」。

この笠居の短歌は、「大島青松園」発となる公文書罫紙の裏に記されている。裏面となった文書は、1944 年 11 月 17 日付で通知された卵 4 日分の配給割当てのようだ。

浅野繁「神韻」は短歌 7 首——「ますらをの神のみこゑを聴きて坐すその母の目のうしろ涼みつつ」「ますらをを持ちにし母とあが母とそのさきはひに触りて嘆かふ」「死にてあらばはた諦めもやすからししか思ふわれに生きよと母は」「病む子を持ちにし母がつくづくに諦めの慨あらたにのらす」と 4 首で「母」をうたう。他方で「齡一つ重ねていまだ日も経ずをますらをははや夷ともろとも」「島棲みの身にもひしひしたたかひの氣息を感じ海波とともに」とわが身もうたう。

ただこの 7 首の冒頭にある、「病む軀には聴きつつし堪へね録音の生きながらなる神のみこゑを」と、さきにみた「ますらをの神のみこゑを聴きて」のうたはなにを詠んだのだろうか。ここにいう、浅野が聴いたという「神のみこゑ」とはなにか。

浅野の短歌は、「多磨詠草用紙」と印刷された原稿用紙の裏にペン書きで記されていた。表裏のペンの手は同一人にみえる。1 枚め原稿用紙では冒頭の 1 行の「学徒らの雪に鍛ふ」に抹消線が引かれ、そのあとに 2 首、つぎの 1 枚は冒頭にある「十月号詠草 昭和十九年」の一部にやはり抹消線が引かれて 3 首がある。この時期に国立療養所多磨全生園内で編集発行されていた総合誌の誌名は「山桜」で、それが「多磨」と改称されるのはのちのこととなる。わたしはまだ、同園内で編集発行されていた短歌や俳句の同人誌になにがあったのかを確認していないが、そうしたところへ投稿するための下書きか、その原稿用紙を使った習作なのだろうか。『山桜』は 1944 年 7 月発行号を最後に以後は休刊となった。

ここにある短歌は、「皇国土犯さるる怒りひた堪へつつ飛行機雲を眼に逐はむとす」「空襲の過ぎてことなきまさ眼にぞあかときあけの雲灼くる海」と戦時をうたう昂揚があらわれ、また、「身の病むはおろかならむか戦ひに召されぬ慨いくたびとなく」「その<sup>うから</sup>族涼みる寒夜をかい寄りて聴きてかまさむ神のみこゑを」とうたわれた前者は、前号に「十二月八日を迎へて」の題のもとで記された1首だった。柵目のある原稿用紙はもとは表で『青松』誌上では裏面となったそこに記された短歌はおそらく習作なのだろうが、そこにあらわれた怒りも実際には胸裏に仕舞われたのだろうか。

1941年12月8日開戦時の「大詔」は、1945年8月15日に放送された「玉音」と違って、「詔」を告げるものの声は響かなかったはずなのだ。『青松』誌上にくりかえし記された「神のみこゑ」はそのとき発せられなかったのではないか。だが、「声」という語に「ことばを出す。述べる」という意味があるというのだから（『新漢語林』）、「神のみこゑ」とは、告げる、言う、の意がある「詔」とつうじていたのかもしれない。

綾井譲の短歌4首は、「水甕社原稿用紙」の文字が印刷された原稿用紙に記されている——「爆音を真近くきけり午前六時敵機まさしく我が上空にあり」は描写に優れ、「きびしかる大聖戦に生かされてある身思へば忝けなけれ」「大君のみ<sup>か?</sup>盾かなはぬ明け暮れは静かに生きる外なかりけり」はわが身を憂い、「生き死には神の摂理にましませりみ民と生れて恥づることなし」と最後には自恃をとりもどそうとしている。

泉俊夫「短歌 特攻隊」は「OS原稿用紙」の文字が入った原稿用紙に記された5首——「忠に純ず心あふるる御言葉は切切として現身に沁む」「御言葉は簡素なれども国思ふ心<sup>ほむら</sup>火焰と秘めにけるはや」とはやはりほかにもうたわれた神の御声への感慨なのだろう。

「壮敵の死をこそ思へ現身のただに慍なく日日を生くべき」とほかでもくりかえされるこうした意思是、戦時がよりいっそう療養者自身にその生を問わせたことのあらわれとなるろう。「B29 何するものぞと若桜我が兵どちの言のよろしさ」「物資のみただに恃める彼奴らはやがて崩るる<sup>さだめ</sup>運命を知らず」とはひたすら威勢よいかぎりだ。

**まにあわせ** 齊木操は謄写版刷り原稿用紙に「予約の真似」と題した文章を記し、表題の脇には「間に合せ書」と添え書きした。「二〇、一、二〇急稿」とある末尾の日付は発行

の二日まえ。この稿は、やはり末尾に記されたとおりの、「三号を素手で通り越す事の自責の念にかられつゝ」記した「話訳」（いいわけか？）のつらなりだった。

斉木の稿の無地の裏面には、「大原節」「串本節」「追分節」「関の五年松」の譜で、まえにも斉木の稿の裏面に譜が記されていたことがあった。

**詠む** 喜田正秋の「俳句」は6句——「天駟くる若き神々国の秋／敵艦に爆散る神鷲国の秋／子の持てる箱のなかなる兜虫／視つむれば蠅虎の拝みけり／勝ちますが日々の挨拶黍の村／唐黍の弁当ひろげて母と坐す」とは、大島のなかとその外のように入り混じっているようにみえる。

**祝辞** 斉木操はこの号に複数の文章を寄せ、もう1つの稿が「青松の誕生を祝して」と本文よりも太いペン字の添え書きがあり、その脇に論題の「親父の弁」がみえる。また謄写版刷り原稿用紙の欄外には、赤いインクの文字で「〈後註〉49年5月再読の自解、自説メモ／2号までの作品概説と自注の====を楽屋ボメの形だが、割りと正確に伝えている。筆者の背伸の癖も、これには、余りなく、幼稚だが素直な感想なので好感もてよう（斉木回顧）」と記されている。どういうきっかけか発行後にあらためて本号を手にとって記したメモなのだろう。それは1949年のことか、それとも昭和49年ということか。

「決戦下の島に生れ出た二世“青松”才前には見得も体裁も構つて遣れないが、それでも才前は天真爛漫としてゐて、親の目には掛替のない愛しい頼もしい倅なのだ」と語りかける体で記されているので、「親父の弁」というわけだ。「倅」たる『青松』を誉め讃えながら既存号の論評へとうつつ——「処で一号だがアレは当地初日の御目見得興行とあつてアレなら上出来だらう」との讃辞をおくり、執筆者ひとりひとりの評となる。

▼土谷座長の三尺大上段に振りかぶつての御挨拶は仲々堂々たるもの、気魄満々としてゐて今後共われわれを大いに引摺り引揚げつゝ突進して呉れる事と、何時も乍座員一同兄貴に信仍し頼もしく思つてゐる。

と編集を担った土谷を評して期待を寄せ、

▼穂波師匠の細い心遣いと、自づから若辺つての登場は総蹶起にふさはしく意義深くして若連中を裨益して大いに効力あり、三番叟の如き重要役割を担当して孫達奮励の妙を

常に采配されるよう切望して止まず。

と穂波を「師匠」と呼んでその役割の重さを仰いでいる。なお、ここにはさきの欄外にあった斉木の赤インクで追記がなされている（下線部。以下同）。

つづけて、「▼次に斯道の先哲青山莊主林大人の批評と激励鞭撻位い出演者に嬉しく有難く且、重要なるはなからう。演者に不断の威力と活力を添ふるべく絶えざる叱咤苦言や御助力を願ふや切である」とそのペンには林文雄にもむけられ、そして、「▼最後にこの出し物は内部でも役者以外の識者及び読解力のある方々に出来る丈広範囲に観て貰ひたいと希望してゐる。（内輪故と不遠慮の雑言を用ひた悪しからず）／二〇、二、二〇記」と閉じられた。最後の日付は書き誤りだろうか。これでは発行後にこの稿だけ追加して綴じたことになってしまう。

**あとがき** 第3号の末尾には「あとがき」があり、1月22日付の土谷勉の署名がある（欄外に署名を指して「←失礼！」とあり）。まず、「○「青松」第三号を送る。頭上を敵機が襲ふけふ、実に感懐なしとしない。もつたいないことである」と始まり、つぎに「○第三号の脱稿者は誰々か。口に関所がないものだから、かばちは叩くが、いざ一つでも行為を伴ふとなると、知らぬ顔でひっこむ。「飯をやるから原稿かけ」——と言つたら誰と誰が書くか知ら。おそらくこの脱稿組など、原稿と入れ物を一緒に持って、にやにやうす気味の悪ひ笑ひをうかべながらの一番に来るだらう」とは、原稿がなかなか集まらなかったようすがうかがえ、「文の道」を説く土谷にしてみれば悔恨といくらかの憤慨があっただらう。

○さて、決勝の昭和二十年である。お互ひ、清くつゝましく頑張らう。書くことは考へることであり、心のみがくことである。何一つ動かうとせぬ癖に「腹がへつた、腹がへつた」と、こぼす奴輩がをる。「腹がへつた、腹がへつた」言ふから一層はらが減るのだ。

「がへつた」といふから一層腹がへるのだ。「腹がへつた」と言ふことにも幾らかのエネルギーの消費を伴ふだらう。〔抹消線は原文のとおり〕

——腹がへつたということにもエネルギーの消費をとまなうとは嫌味だが、それでもいくらか柔らかく、書くことは考えること、こころのみがくこととと説き勧めている。

土谷は、林の「御感想」に謝辞を捧げ、くわえて、「尚、その他の方々／園長先生、事務

官殿、等々、お役所の方々がたゞの一行宛でもよい、ほめたり、くさしたりなどして下さるとよい。それだけの事が皆にどれだけ書き甲斐を感じさせるか知れない。お忙しい仲をお願いしたいものである」と療養者が記すことのできる大島の療養所は、「お役所の方々」と在園者とのあいだの隔たりが、そうかけ離れてはいなかったようにみえる。

ついで、寒さゆえに風邪にからだに注意を、との挨拶がのべられ（「本病だけは致方ないとして、その他の病気だけはごめん蒙りたいものである。火傷なども吾々につきものだが、出来るだけ気をつけて火傷をしたくない」とも）、次号の予告と決意を示し、最後に「○ではおよみになつたらどなたでもよいから裏表紙になど別紙に書いて貼らうと随意です。御感想を入れて下さいませ。一同書き甲斐を感ずるから」と記して「あとがき」が閉じられた。

**書簡** この第3号末尾にはなぜか、2通の書簡が綴じられている。どちらも宛先は林文雄で、差出人は、1通は徳田祐弼の名があり（1945年1月1日付。「日本標準規格A列4番10×20」の原稿用紙）、もう1通には三浦清一の名がある（1月17日付。「台湾基督教会報原稿紙」）。前者は沖縄県国頭にある療養所愛楽園在住者で、牧師である後者は、これが1945年1月の日付だとすると、このとき台湾から神戸の愛隣館へ移っていたところで、文面にも「愛隣館の仕事も漸やく之から本格的にはじまります」と記してある<sup>3)</sup>。

土谷はその「あとがき」で「○青山荘、林先生のお便りを前掲の通りのせました。無断ですが叱られはすまいと思ひまして——」と記したそのとおり、本号「巻頭言」のあとに載せていた林の便りはそうおおくはない紙幅で、他方で巻末には5枚にわたる林宛ての私信がことわりなく綴じてあった。

**感想** 巻末にはまた土谷が記したとおり、いくつかの感想が記されていた。まずは「園長評」（以下、[ ]は複数の字数分におよぶ判読不能箇所や誌面破損をあらわす）、

青松既に三巻、編者の苦心もさこそ[ ]いつもながら編輯が面白い、殊に文の道[ ]

---

<sup>3)</sup> 徳田は沖縄で、徳島出身で大島青松園にいたことのある青木恵哉と交流のある療養者（青木については、阿部安成、石居人也監修、解説『選ばれた島』リプリントハンセン病療養所シリーズ1、近現代資料刊行会、2015年、を参照）、三浦については、藤坂信子『羊の闘い—三浦清一牧師とその時代』（熊本日日新聞社、2005年）がある。

の内用薬原稿紙など天下逸品であ [ ] 将来これを印刷にするときはこの雑誌の実  
[ ] 景 そのものを肉筆と共に版画に致たし [ ] ものである、本誌こそ今戦へ  
る日本 [ ] である [ ] もよい体裁は [ ] 尊いものである。／歌もよし句  
もよし文もよし、個々 [ ] 山荘主人の適評に譲るこの [ ] そは又本誌に一段の  
光彩を [ ] の外はない。志真氏敵機頭上にあり、一億の末 [ ] 我も又片居の日  
日を神風 [ ] そうだ！ほんとに！！此の意気ぞ！！野島

——「事務官評」「医務課長評」の文字もみえるが、そこに評の記述はなく、園長野島ひとりがペンをとったのだった。

**手づくりで詠む** 本誌第1号に土谷勉が執筆した「あとがき」によると、本誌をつくる発端は園長野島の発言にあり、短歌を詠むものたちの賛同があり、そして「おしつけて任」された土谷が編集を担い、誌名をつけて創刊号ができた。「廻覧雑誌」をつくろうと「いきごんだ」療友たちは、『松籟』と『星霜』と名づけられた歌集の同人だった。もとより短歌や俳句をつくる意思があり、それに馴染んでいたものたちが手づくりの『青松』に寄稿したのだから、誌面に定型詩が多くなるのは当然のなりゆきでもあった。

ただ、「武」の時代に「文」の自立を掲げた土谷がこの『青松』へと療友を牽引してゆこうとすると、詠歌はただ季節、天体、自然、そして時局を表現するにとどまらず、詠みうたう季節とわれ、時局とわれわれ、などなどと強烈にわれやわれわれを顕すこととなる。